五分次郎　　山形県

むがし、むがし。
あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。ふたりには、子どもがいませんでした。
あるとき、おばあさんの親指の腹が痛くなってきました。「なんだろう」と思って、包帯を巻いておきました。親指は、どんどん腫れてきて、とうとう皮がぺりっとむけて、そこから赤ん坊が生まれてきました。五分（1，5センチメートル）しかない赤ん坊でした。
「あらあ、指の腹から赤ん坊が生まれたよ。たまげた、たまげた。何て名前をつけようか」と、おばあさんがいうと、おじいさんは、
「そうだなあ。五分しかないんだもの、五分次郎ってつけたらいいだろう」といいました。
ふたりは、五分次郎をたいせつに育てました。
五分次郎は、からだは小さくても、何年かたつと、外へ遊びに行くようになりました。あるとき、海辺で遊んでいると、風が吹いて来て、木の葉が飛んで来ました。木の葉は波間に浮かびました。五分次郎は、まるで船みたいだと思って、そっと木の葉に乗りました。すると、風がすーっと吹いて来て、五分次郎を乗せたまま、海のまんなかまで流れて行ってしまいました。
「困ったな」と思っていると、木の葉の船は、風に吹かれ、波に流され流されて、ようやく向こうの岸につきました。
「やれやれ、これでやっと、命びろいした」
五分次郎は、木の葉の船から下りましたが、もう夜になっていたので、
「どこかに泊めてもらおう」と思って、一軒の家の戸をたたきました。
「ごめんください。こんばんは」
けれども、だれも出て来ません。そこで、次の家に行って、
「ごめんください。こんばんは」といいましたが、やっぱりだれも出て来ません。村じゅうの家をまわりましたが、だれも出て来ませんでした。
「ふしぎだなあ」といいながら、しまいに、大きなお屋敷の門をたたきました。
「ごめんください。こんばんは」
すると、奥から、「はーい」と、声がしました。
「こんばんは。ひと晩泊めてください」というと、おばあさんが出て来ました。おばあさんは、
「この村には、化け物がすんでいて、村の人を次つぎと食っていくけれど、それでもよかったら泊まんなさい。今は食べる物もないし、だれもいないけど、それでもよかったら泊まんなさい」といいました。五分次郎が、

「化け物がいたっていいから、泊めてください」というと、おばあさんは、
「そんなら、わしは、この石の唐櫃（からと）に入って寝るから、おまえは、どこでもいいから、好きなところで寝るといい」といって、床下の石の唐櫃の中にぺろっと隠れてしまいました。
　五分次郎は、あんまり小さいので、どこを見ても、どこもかしこも大きすぎて寝る所がありません。しかたなく、仏さまの抹香箱に入って寝ました。
　夜中になると、みしっ、みしっ、みしっと音を立て、化け物が出てきました。化け物は、
「なんだか、今夜は、人くさい。仏さまの中から人間のにおいがする」といって、くん、くん、くんと、仏さまをかぎました。そのとたん、五分次郎は、化け物の鼻の穴に、つるりと吸い込まれてしまいました。
　化け物のおなかの中に入ってしまった五分次郎は、溶かされちゃたまらんと、針の刀を抜いて、ジャギモギと、化け物のおなかを突きました。化け物は、
「痛い、痛い、人間が腹に当たった」といって、あばれまわりました。五分次郎が一生懸命、刀で突いているうちに、化け物は、倒れて死んでしまいました。
　五分次郎は、化け物のおなかから出て来て、
「ああ、よかった、よかった。もう少しで溶かされるとこだった。ばあちゃん、ばあちゃん、化け物を退治したから、安心して出ておいで」といいました。おばあさんは、石の唐櫃から出てきて、びっくりしていいました。
「あら、あら、あら。おまえ、またどうやって、こんな大きなものを退治したんだ」
「おれ、化け物にのまれたんだが、溶かされちゃたまらんので、刀で化け物のおなかをジャギモギと突いたんだ。そしたら、化け物は、腹痛を起こして、死んじゃった」
　夜が明けると、おばあさんは、村の人たちを集めて、
「昨夜、うちに泊まった人が、化け物を退治してくれたぞ」といいました。村の人たちは、化け物を見て、
「ごつい化け物だ。よかった、よかった」といって喜びました。
　お日さまが照ってくると、化け物は、手を出し足を出し、しっぽを出して、正体を現しました。それは、大きなむじなでした。
　五分次郎は、おばあさんから、
「どうか、うちのあと取りになってくれ」とたのまれて、その家の主人になりました。そして、末永く、幸せに暮らしたということです。
　どんべすかんこ　ねっけど

原話:『五分次郎』野村純一・敬子／桜楓社
再話：村上郁